

## 例会要旨

2011年12月15日

於 筑波大学筑波キャンパス

### ジェントリフィケーションにみる都心空間の変容 — トロントと東京 —

山下宗利 (佐賀大学)

本報告は、新しいジェントリフィケーションの動向を捉え直し、トロント都心周辺部（キングスパダイナ地区）を事例に、近年の都心空間の変容とその背景を検討したものである。あわせて1987年当時の東京都心部（中央区日本橋三丁目6番地）と現在とを比較検討し、都心空間の新たな方向性を示した。

キングスパダイナ地区はトロントの都心金融街の西に隣接している。従来は、印刷関連工場や縫製工場、倉庫といった都心周辺部に典型的な土地利用が卓越していたブロックであった。しかし1990年代中頃からの規制緩和策の導入、民間活力の導入、経済のグローバル化の進展に伴い、キングスパダイナ地区では高層のコンドミニアムの建設が相次ぎ、都市景観を大きく変えてきた。都心周辺部への再投資と中・上流階層をターゲットとした空間・ライフスタイルの出現が観察でき、ジェントリフィケーションの中でも new-build ジェントリフィケーションの流れが生じている。報告では土地利用分析とともにこの流れの背後に横たわるトロント市とオンタリオ州の諸政策との関連を明らかにした。

報告者は東京駅周辺の土地利用を階数別に分析し、東京都心部の空間利用を明らかにしてきた。上記のキングスパダイナ地区と異なり、都心に位置している日本橋三丁目6番地における変化を示した。このブロックでは土地所有の法人化が2004年以降に進み、土地信託手法を用いた再開発が中央通り沿いで行われた。一方、ブロックの東側では個人の所有地が残り、1987年当時と変わらず、商売が継続されている。四半世紀を経て、低層階の商業的利用の卓越とともに、中・高層階におけるオフィス利用・居住利用へと、空間利用の高層化と純化が生じていることが明らかになった。この変化は、都心空間を垂直的な視点により階層別に分けることの重要性がより鮮明になってきたことを示すものである。

2012年1月27日

於 筑波大学筑波キャンパス

### ブラジルの熱帯湿原におけるフィールドワーク

仁平尊明 (北海道大学文学研究科)

海外におけるフィールドワークの体系化を目指す研究の一端として、私が研究グループの一員として携わってきたブラジル・パンタナールの調査を事例として、熱帯湿原におけるフィールドワークの方法と課題を検討した。その内容は、(1)日本での資料収集と準備、(2)ブラジルの都市部における資料収集、(3)

現地（熱帯湿原）でのフィールドワーク，(4)フィールドワークの安全対策である。

日本での資料収集では，インターネットによりブラジル地理統計院などの政府機関から地図や統計資料を入手したり，ブラジルの主要な学術雑誌を閲覧することが可能である。宿泊場所の手配や語学の習得などの基礎準備も大切である。ブラジルの都市部では，政府機関や大学などを訪問して，地形図や資料を購入したり，宿泊地で使用する物品を速やかに入手する。現地での主なフィールドワークは，景観調査，土地利用調査，畜産調査，聞き取り調査である。景観調査では，カメラやビデオによる撮影だけでなく，その内容を聞き取り調査で確認する必要がある。土地利用調査では，大縮尺の地図はGPSとGISによって作成し，場合によっては空中写真を参照する。大規模な農場や流域の地図を作成する場合は，衛星写真の活用が有効である。畜産調査では，GPSとバイトカウンター首輪を使用することで，放牧牛の移動経路と採食量が計測できる。さらに，聞き取り調査では，調査票とICレコーダーを使用して，農場主や従業員へインタビューをする。これらの調査結果を複合的に考察することにより，今後の農場経営のあり方を提案する研究成果に結びついている。安全対策では，ブラジルの都市部と熱帯湿原における危機管理の例を紹介したが，紙面の都合上，内容は別稿にゆだねたい。

以上，農業地理学とアメリカ地誌を専門とする私のフィールドワークを述べたが，今後は他地域や他分野の方法が公表されることにより，フィールドワークに関わる研究の充実が望まれる。